

Eureka X

六年制通信 No.28 令和4年12月9日(金)号

途中

前回は若いときの「今」の大切さについて書きました。「今」を精一杯生きること、結局私たちの人生はそうして充実させた一日の積み重ねなのですね。そして、誰もが死へと向かって歩いています。これだけは避けられません。だからこそ、私たちは定命(じょうみょう)尽きるその日まで、懸命に生きなくてはなりません。死という、人生の「終わり」を神様が私たちに与えた意味は、恐らくそのことによって私たちの生を輝かせようとしたのではないかと、どこかでそんな話を読んだ覚えがあります。充実した一日とは、以前紹介したように「朝は希望をもって目覚め、昼は懸命に働き、夜は感謝とともに眠る」、そんな一日です。「懸命に働き」は、君たちにとっては「懸命に勉強し」でしょうが、働くのも勉強するのも英語では **work** でよろしい。君たち生徒も私たち教師も、毎日ワークしているのです。ワークに力を注ぐと一日は充実します。しかし、光が強ければその分影が濃くなるように、毎日を懸命に生きれば生きるほど悩みも出てきます。私たち大人も、仕事をしようとするやと突破しなければならぬ壁が見えてきます。何もしなければ、何の苦労もないかわりにスカスカの人生を生きることになるでしょうが、そんなのイヤだね。昔の青春ソングに「春の嵐が過ぎたあと何もしなかったと嘆くより、過ち悔やむ方がまし」だったか、そんな歌詞がありました。充実した人生には悩みや後悔も多いということですね。君たちもきっと同じではないですか。勉強もし、人と関わり、成長しようとするやと、その分悩みも抱えます。辛いこと、悲しいこと、誤解されて苦しいこと、そんなことは今だけでなく、これからもたくさん味わいます。君たちは小さな集団しか知らないから、いったん辛くなるとその集団から逃げたくなるかもしれません。逃げられそうな気がしますからね。空間的にも時間的にも、想像できる範囲や経験してきた範囲が狭いから、それは仕方ないのですが、大人になれば、どんな集団でも自分を中心に回ってはいないこと、自分が変わらずに周りを変えようとするやとは不可能なこと、そんなことがわかってきます。自分にとって絶対的に快適な場所、そんなものはどこにもないということがわかってきます。ユートピア(理想郷)の語源は古典ギリシア語でウー・トポス、英語に直せば **nowhere**、つまり「どこにもない」ということ。皮肉なネーミングですが、実に正しいね。

さて、辛いこと、苦しいこと、悲しいこと、逃げたくなること、そういったことをどうやって解決していけばいいのか。特効薬はないでしょうが、要は心の持ち方、考え方を「鍛える」ことが大切だと思います。私は四つのことをお勧めします。

まず、「自分を信じる」ことです。自分の取った言動は自分の選択です。まずそう思

うこと。誰のせいでもないということ。ですから、そのことで生じた人間関係の軋轢はすべて自分で引き受けるしかありません。私の言う「自分を信じる」とは、自分が正しいと思うことではなく、自分の選択から生じたことをちゃんと自分の責任と受け止めるということです。軋轢が辛くても、それは当然ということです。

次に、「他人に期待しない」ことです。君は王子様でも王女様でもないのです。君が全ての中心になって、周りの人が君だけを大事にする、そんな生後三か月の赤ちゃんみたいな生活はもうありません。人が百人いたら百通りの正義があります。君と真逆の感性を持った人もいます。そんな中で人は様々なことに折り合いをつけて生きていかななくてははいけないのです。大人になるということはそういうことです。

三つめは「視点を変えてみる」ということです。人間関係のことではありませんが、例えば 100 人でトーナメントを戦ったら優勝が決まるまでに何試合行わなくてはならないかという問題で、一回戦が 50 試合で…と数えていくのもいいでしょうが、一回の試合で一人の敗者が生まれるのですから、優勝者を除く 99 人が負ければいいのだと気づけば 99 試合だとわかります。ものの見方によって、難しそうなお題も簡単になってしまいます。人間のような重層的で複雑な生き物の、たった一面だけを見て判断してはいないか、少し見方を変えてみることはできないか、そう自問することが大切です。

最後に「途中だと捉える」ことです。まだ 10 代の君たちは、今が人生の頂点ですから、ここで苦しいことに出会うと、その先を考えることができなくなります。しかし、今の苦しみは人生のまだまだ途中に起きている現象です。私だって、今の自分もまだ人生の途中、これから先もっと苦しいこと、あるいはもっと嬉しいことが待っているかもしれません。今の苦しみが最後だと思わないことです。

今週のおすすめ

・原田宗典 『どこにもない短篇集』 (徳間文庫)

設定はありふれた日常。そこに起こる非日常。面白いけれど不思議で怖い話が十七篇入っています。不思議で、どこまで想像力を駆使しているのかと思わせる短篇は小松左京の得意とするところですが、筒井康隆や阿刀田高にもそれぞれ持ち味があり、読めば誰が書いた作品がわかります。私は原田さんの作品はこれが初めてだったので、恐らくこれから先何か短篇を読んで、原田さんの作品かどうか当てると言われたらできる気がします。作者の色合いがこの一冊でわかりますから。

どの短篇も味がありますが、私は「同窓会の夜」が好きです。この話、絶対にありえないはずなのですが、本当にないと言い切れるかと問われると、いや、ひょっとしたらあるかもしれない、そしてあったら本当に怖い、そう思ってしまった。同窓会に出かけたら懐かしい顔顔顔、しかし、彼らの話す思い出話が自分の記憶と食い違っている。修学旅行の行き先も、体育教師の年齢も、確か弓道部はなかったはずだ、なんだかおかしい、だんだん気分が悪くなってくる、そのとき隣の女性が私の肩に手を置いて話しかける…。吐きそうになってトイレに駆け込むと、そこには…。

BGMは Mariah Carey の *Hero* でした…。